

課題名 知的障害者の生涯学習支援に関する研究 —— オープンカレッジの試みを通して ——

研究代表者名 川住 隆一 (人間発達臨床科学講座)

研究組織等 田中 真理 (人間発達臨床科学講座)
細川 徹 (同上)
菊池 武剋 (同上)
李 仁子 (人間形成論講座)

研究目的と方法

近年大学においては、従来からの身体障害者（視覚障害者、聴覚障害者、肢体不自由者等）に加えて、「発達障害者支援法」で規定される軽度発達障害者の大学での勉学の機会（大学の教育カリキュラムに基づく勉学の機会）を保障することが求められるようになってきた。一部の大学においてはまた、地域社会に対する貢献の一環として、公開講座あるいはオープンカレッジを通して知的障害者の生涯学習支援が試みられるようになってきている。この取り組みの目的としては第1に、学習を通して社会人としての生活や個人の生活が豊かになること、第2に、当事者同士の交流が促され友人関係が広がることがあげられている。しかしながら、知的障害者が大学で学ぶことの意味は、彼らが学ぶことの楽しみを見出すことや新たな知識を得ることだけではなく、大学生と知識・体験を共有し討論の中から様々なことに気付くこと、また教員・学生が専門性を問われる場面に立ち会うことにあるのではないかと考える。そこで本研究においては、(1)知的障害者の学習ニーズを探りつつ、東北大学大学院教育学研究科の専門性を生かしたオープンカレッジの学習プログラム内容と援助方略を探ること、(2)講座に参加した学習者（知的障害者）の意識の変容について探ること、および、(3)共同学習者として講座に参加した学部生・院生の意識の変容について探ることを目的とする。

研究経過

- ① 研究スタッフは、上記5名の教員に加えて、発達障害学専攻の大学院生・学部生とした。運営には、主として川住・田中と大学院生・学部生が携わり、「総括」「広報」「会計」「企画・庶務」を分担した。講座の講師は、細川・菊池・李が務めた。
- ② 当オープンカレッジの名称を「東北大学オープンカレッジ『杜のまなびや』」とし、講座は10月14日（土）、11月18日（土）、12月9日（土）の3回実施することにした。講師および講義題目は、次の通りとした。
1回目 李 講師 「外国に生きるこどもたち」

- 2回目 細川講師 「見るということ」
- 3回目 菊池講師 「働くことについて」

③ 講座の対象として、学習者は言葉による会話とひらがなによる読み書きが可能な18歳以上の者10～15名、共同学習者は本講座に関心のある学生スタッフ以外の学部学生10名程度とすることにした。また、3回を通して参加可能であることが望ましいとした。パンフレット (Fig.1) を作成した後、養護学校および関係機関の協力も得て受講者を募った結果、学習者11名 (高校生1名、一般・福祉就労者10名) および共同学習者10名 (教育学部生7名、法学部生3名) からの参加希望が得られた。

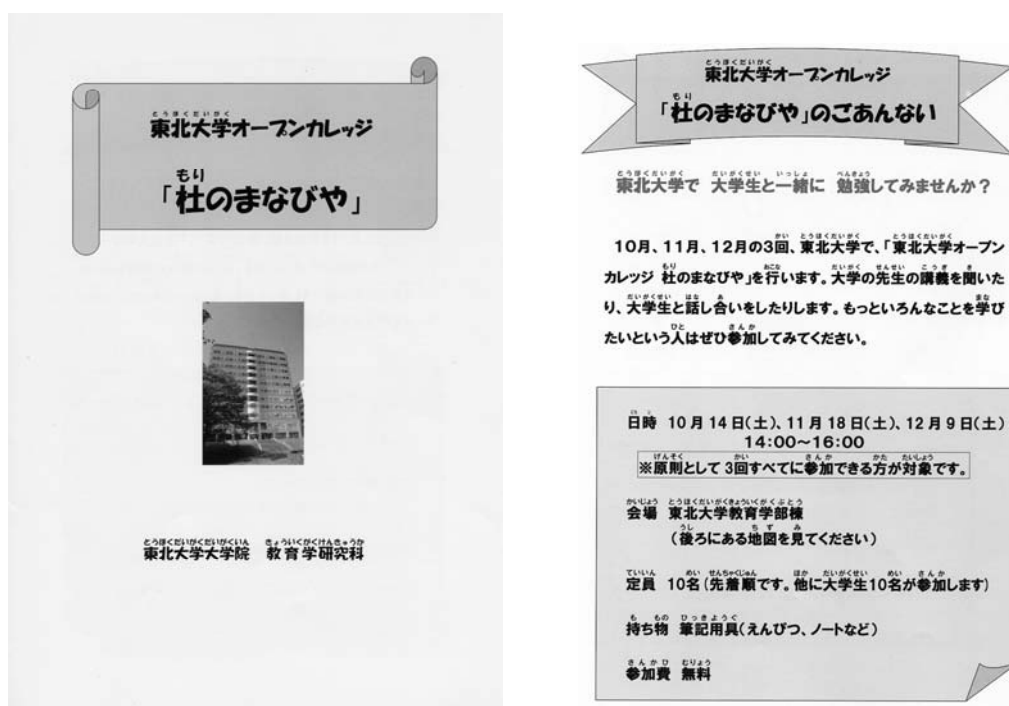


Fig.1 パンフレット (一部)

- ④ 研究目的の(2)と(3)のため、講座対象者に対し事前・事後2回の面接・アンケート調査を実施することにした。また、各講座の感想を把握するため、各回終了時にもアンケート調査を実施した。
- ⑤ 各講座とも講義資料を作成した。資料は、講師の原案を踏まえて、講師と担当院生が話し合いを重ね、パワーポイント資料へと作り上げていった。また、資料の漢字にはひらがなのルビを付した。授業時には、資料のみならず参考となる具体物や映像資料も取り上げられた。
- ⑥ 各講座の時間は2時間とし、a. 講師の話、b. 実技・実習、c. 休憩、d. 受講者同士の討論と発表、e. 講師によるまとめの時間、f. アンケート記入で構成した。実施

ごとに映像・音声記録を残し、また、各講座終了後、スタッフ全員で若干の省察時間を設けた。

- ⑦ 面接・アンケート調査の実施、および音声記録の文字化は、院生・学生スタッフによって行われた。

研究成果と課題

3回を通しての研究成果に関しては、本誌において大内らによって報告され、「3回の講義後に行われたアンケートの結果から、学習者にとってオープンカレッジは、単に知識を獲得するだけでなく、自分の興味・関心を広げる、あるいは、社会的なスキルを獲得するという点に意義が見出された。一方共同学習者にとっては、知的障害者とのコミュニケーションスキルの獲得、あるいは、彼らの障害者感に変化を与えるという点に意義が見出された。」とまとめている。

また、本研究においては、受講者へのアンケートの他に、学習者の一部の保護者・家族に3回の講座を通しての感想を伺っている。それによると、帰宅後の様子からとても楽しかったことが伝わってきた、次回を楽しみにしている様子が伝わった、仕事の都合で一度休んだが非常に残念がっていた、3回参加できて自信がついたと話している等の声を聞くことができた。

学習者の参加時の様子やアンケートを通して学習意欲の高さを把握できたが、今後どのような内容の講座を望むかという点についてのニーズの把握は、今回十分に行われていない。また、学習者の中に1名弱視の方がいる。このため他の参加者よりも文字の大きいパワーポイント資料を用意したが、これ以外の情報保障に関してさらに検討が必要である。

院生・学生スタッフ

本研究の企画・運営・推進に関わった東北大学大学院教育学研究科および教育学部の院生・学生の皆さんは以下の通りである（敬称略）。

大学院生・研究生：鈴木恵太・郷右近 歩・中村保和・廣澤満之・笹原未来・榎本泰亮・
大内将基・小島未生・佐藤彩子・杉浦竜也・半澤真理・北 洋輔・
杉山 章・中山奈央

学 部 生：太田祥子・高橋江理子・五枚橋紗織・高橋真衣子・野崎義和・横田晋務